

# 学生時代と図書館55

## — 図書館と教育・研究活動 —



奥川 義尚



私の場合は、学部課程、大学院前期課程、大学院後期課程での学生生活を、それぞれちがった大学で送ったので、3つの大学の図書館での思い出がある。

学部課程での学生生活は京都外国語大学で過ごしたが、在学中は現在の7号館の図書館が建設されていなかった時期もあり、4号館にあった図書館での思い出がほとんどである。もちろん現在は教室として使われている部屋が図書館であったので、今の様な立派な図書館と比較して決して十分な設備であったとは思えないが、しかし図書館で過ごす時間は充実していた。宿題や試験の準備、また自分の興味・関心のある書物を読みふける絶好の場であった。

大学院学生生活はアメリカの大学で送ったが、大学院前期課程はピッツバーグ・カンザス州立大学、また後期課程はオクラホマ州立大学に在学した。アメリカの大学の図書館は書架が公開されている開架式図書館であったので、すべての文献を手にとって見ることができ、実際の本を見ながら研究に必要な資料を探せた。ピッツバーグ・カンザス州立大学は学生数が5,000人程度の中規模大学で図書館もさほど大きくなかったが、オクラホマ州立大学には図書館学部を含む10学部があり、大学院での研究が活発な研究型大学であったので図書館も大規模であった。書籍、政府関係出版物、マイクロフィルムなども豊富であり、また早朝から深夜12時まで開館されていたので、図書館は、私にとっては授業の予習や復習、試験の準備、レポートや博士論文作成のための場であり、時には同僚の院生との情報交換や、疲れ切った時には休息をとる場でもあった。今から思えば、アメリカでの留学生時代は、当時住んでいたアパートやその他の如何なる場所よりも、図書館で過ごした時間が長かった様に思う。毎日、早朝から閉館間際まで図書館にいたので、当時、アメリカ人の友人からは「ライブラリアン」というニックネームで呼ばれたこともあった。

話は変わるが、私は研究分野として高等教育論、特にアメリカの大学院評価研究を実施しているが、一連の研究を通して言える図書館の重要性について述べたい。アメリカの大学院は世界の学術研究の中心地として評価されているが、このことは学術研究活動が受賞の大きな理由となる経済学、物理学、化学、医学生理学の各分野におけるノーベル賞受賞者の数からもいえる。2001年から2005年までの5年間についてみると、経済学の分野では計10名のうち、アメリカ大学研究者のノーベル賞受賞者の数は8名、物理学の分野では計15名のうち10名、化学賞の分野では計14名のうち8名、医学生理学の分野では計12名のうち5名である。これらのアメリカ人ノーベル賞受賞者を所属大学別に分類し、それらの大学の共通点を見てみると、ハーバード大学を始め、いずれもが図書館の目録化された書籍総数は全米の大学のなかでもトップクラスである。統計的に分析してみても大学図書館の総合的な充実度である「図書館の規模（書籍数）」と大学における教育・研究能力などの「学問的生産性」には、高い相関関係があることが実証される。いいかえると図書館が充実している大学ほど学問的生産性が高い。すなわち教育・研究活動が高く評価されているのである。

以上述べてきたように、大学図書館は、教育・研究機関である大学のアカデミックな活動の中核の位置を占める重要な施設なのである。

おくかわ よしひさ（教授・教育学）